

ま み や り ん ぞ う  
間宮林蔵

かいきょう 間宮海峡の発見者 つくばみらい市



(間宮林蔵記念館提供)

安永9年(1780) - 天保15年(1844)。筑波郡上平柳村〔つくばみらい市〕の農家に生まれる。小貝川の堰止め工事で才能を認められ、江戸に上る。寛政11年(1799)、幕府普請役村上島之允の従者として、初めて蝦夷地〔北海道〕に渡る。翌12年には、幕府役人に登用され、その後文政5年(1822)まで、蝦夷地の新道開発や植林、測量などに従事する。その間、文化5年(1808)から翌年にかけてカラフトの探査を行い、間宮海峡を発見する。測量家伊能忠敬とのつながりは深く、「大日本沿海輿地全図」の完成に貢献する。『東鞆地方紀行』、『北夷分界余話』、『北蝦夷島地図』などを残す。

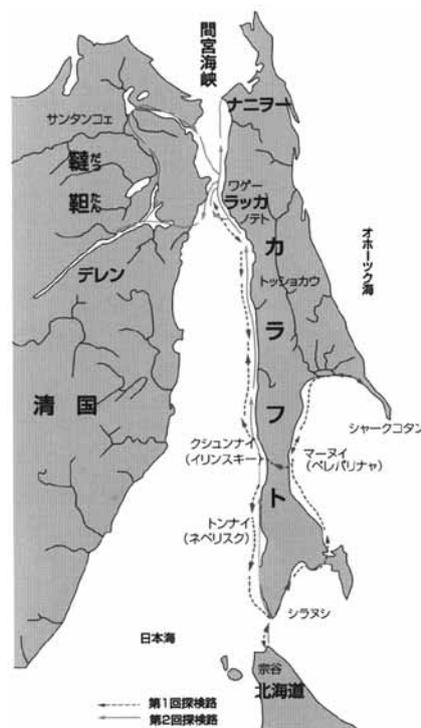
間宮林蔵は、安永9年(1780)、筑波郡上平柳村〔つくばみらい市〕の農家に生まれました。林蔵は少年時代、家の近くを流れていた小貝川の土木工事について、幕府の役人に意見を述べると、役人は林蔵の才能に感心し、江戸に出て学問をするようにすすめました。

江戸に出た林蔵は、測量学などを学びました。その後幕府の土木工事を担当する役人であった村上島之允に従い、寛政11年(1799)に、蝦夷地〔北海道〕巡視の一行に加わりました。蝦夷地は当時、松前藩が治めていましたが、幕府は享和2年(1802)、蝦夷地奉行〔後に松前奉行に変更〕を設立して、本格的に蝦夷地や周辺の島々の調査を開始しました。林蔵は、文政5年(1822)、松前奉行が廃止されるまで、この北方の地を中心に活動することになります。

寛政12年(1800)、林蔵は函館で伊能忠敬と出会います。そして本格的な測量技術に接し師弟の交わりを結びます。のちに、忠敬が作成する日本で最初の本格的な実測地図である「大日本沿海輿地全図」の蝦夷地部分の作成に貢献します。

このころ、ロシアやイギリスなどの船が、たびたび日本の各地に現れていましたが、文化5年(1808)、幕府はロシアや清国との関係を調べるため、林蔵と松田伝十郎にカラフトの調査をするように命じました。林蔵は生きて帰れないと考え、故郷の寺に自分の墓を建て、死を覚悟して出発しました。

カラフトに渡った林蔵たちは、カラフトが島であれば、いつかは出会えるだろうと考え、伝十郎は西海岸



林蔵の北方探検図  
(間宮林蔵記念館提供)

を、林蔵は東海岸を北上しました。林蔵がシャークコタンまで来ると、その先は海が荒くて先へ進むことができません。引き返して島を横切り、西海岸に渡り、また北上して伝十郎と合流しました。北のラッカまで進むと、海の向こうに陸地が見えました。さらに北へ進もうとしましたが小舟では困難です。

(カラフトは島にはちがいないが、まだ確かめたことにはならない。もう一度調査したい。)

林蔵は、自分から二回目の調査を幕府に願い出、今度は一人で出発し、カラフト北部のナニヲーまで到達し、カラフトが完全な島であることを確認しました。さらに、地元の人々に同行して大陸に渡り、清国の役人と会い、大陸の状況を細かく調査するとともに正確な地図を作成しました。この調査の様子は、後に幕府に提出された『東鞆地方紀行』にくわしく記録されています。

食料が不足して木の実を食べたりしながら、また、きびしい寒さと言葉の壁にたいへんな苦勞をしながら、林蔵はこの調査をやり遂げました。大陸とカラフトの間は、後にドイツ人シーボルトが著した『日本』という本の中で「間宮海峡」と名付けられ、全世界に紹介されました。「間宮林蔵」の名は、世界地図に名を残すただ一人の日本人といわれています。

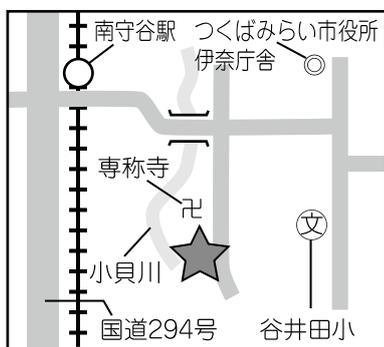
林蔵はその後も幕府の役人として、晩年まで日本国内に現れた外国船の調査などにあたりますが、天保15年(1844)2月、病気のため江戸の自宅で亡くなりました。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 間宮林蔵記念館

所在地 つくばみらい市上平柳6-4-6

内容 間宮林蔵の生家が保存・公開されているほか、『東鞆地方紀行』、『北夷分界余話』、『北蝦夷島地図』や間宮家所蔵の資料などを展示しています。



### おもな 参考文献

『図説 伊奈のあゆみ 伊奈町史通史編』(伊奈町史編纂委員会・2007)

『間宮林蔵の再発見』(大谷恒彦・筑波書林・1982)